



ニューズレター

No.17 June 2008

NEWSLETTER

日本水環境学会九州支部

発行：社団法人 日本水環境学会 九州支部

URL：http://www.jswe.or.jp/katu/shibu/kyushu/kyushukatu.html（水環境学会九州支部情報）

事務局；〒814-0180 福岡市城南区七隈 8-19-1

福岡大学工学部社会デザイン工学科（担当：山崎）

TEL: 092(871)6631 内線 6462 FAX: 092(865)9460

E-mail: yama@fukuoka-u.ac.jp

水環境学会九州支部からの連絡をメールで
希望される方は、上記メールアドレスまで御連絡下さい。

ニューズレター担当者連絡先；
福岡県保健環境研究所（担当：熊谷）
〒818-0135 福岡県太宰府市大字向佐野 39
TEL: 092(921)9948 FAX: 092(928)1203

目 次

- 1 支部長挨拶
熊本大学大学院自然科学研究科 古川 憲治
 - 2 平成 19 年度水環境学会九州支部大会研究報告
福岡市保健環境研究所 水落 敏朗
長崎大学工学部 西田 涉
佐賀大学低平地研究センター 山西 博幸
鹿児島大学工学部 高梨 啓和
 - 3 平成 19 年度水環境学会九州支部大会総会報告
宮崎大学工学部 鈴木 祥広
 - 4 平成 19 年度支部表彰者よるこびのことば
学術奨励賞 九州大学大学院農学研究院 鬼倉 徳雄
水環境貢献賞 ふくおか湿地保全研究会 服部 卓朗
 - 5 水環境若手研究・実務者育成基金による学術研究補助事業による助成報告
佐賀大学有明海総合研究プロジェクト 山本 浩一
長崎大学工学部 西田 涉
 - 6 九州支部からのお知らせ
大分工業高等専門学校 高見 徹
- 平成 19 年度支部収支報告ならびに平成 20 年度支部収支（案）
平成 20 年度水環境学会九州支部役員

1. 支部長挨拶

熊本大学大学院自然科学研究科 古川憲治

新緑の候、水環境学会九州支部の会員に皆様には、お変わりなくお過ごしのことと、お喜び申し上げます。

九州支部の支部長を加納先生から引継ぎ 1 年が経過しました。昨年は、9 月に熊本大学工学部で日本水環境学会のシンポジウムを開催しました。関東、関西地方以外で開催されるシンポジウムということで、例年通りの参加者が集まるか懸念しましたが、九州支部の役員、会員の皆様方のご理解と、ご協力により、ほぼ例年通りの 370 名の参加者を集めることができ、成功裏にシンポジウムを終えることができました。ここに改めて、九州支部の役員、会員の皆様に厚く御礼申し上げます。このシンポジウムには、熊本市、廃棄物学会九州支部から後援を頂き、補助金を頂きました。また熊本市からは、全国一の特級水として評価されている水道水源の水をペットボトルにボトリングした、熊本市のオフィシャルウォーター「熊本水物語」の提供を受け、シンポジウムの出席者全員に配布することができ好評を博しました。さらに、熊本市の幸山市長には、公開シンポジウムの冒頭に挨拶を頂きシンポジウムを盛り上げていただきました。改めて熊本市のご協力を厚く御礼を申し上げたいと思います。

昨年度は、このシンポジウムという大きな催し物があったこともあり、その他の支部活動を十分に行うことができず、会員の皆様にはご迷惑をおかけしました。今年度は、山崎副支部長の企画によるシリーズ講習会「真に豊かな水環境を目指して」を実施する予定にしています。支部役員のご協力を得ながら九州各地の水源等を見学し、地域に根ざした水の育む文化を知ること、水の重要性を再確認する見学会にしたいと考えています。支部会員の皆様には、別途ご案内を差し上げますので、奮ってご参加下さい。

「21 世紀は水の世紀」といわれています。人口の増大、地球温暖化により、このところ特に水の重要性が強く認識されるようになって

きました。我々日本人の多くは、水問題というと、どこか遠くの国で起こっている問題と捉えがちですが、日本の食料自給率が 40%を切っていることと水問題をリンクさせて考えなければなりません。食料を外国から輸入することは、その食料の生産に必要な水、肥料を輸入していることと同じことで、仮想水(バーチャルウォーター)を考慮し、日本で必要な食料を全て日本の水資源で賄おうとすると日本でも水が絶対的に不足することになります。水を有限な資源と捉え、その循環再利用を頭に入れながら、水問題に取り組むことが求められています。この点から、我々日本水環境学会員の果たすべき役割は大きなものがあります。支部会員の皆様のご理解と、ご協力を得ながら、地に足の着いた水問題に貢献できる学会支部活動を進めて参りたいと思っています。支部活動の活性化のため、忌憚のないご意見、ご提案を支部事務局までお送り頂ければ幸甚です。

最後になりましたが、支部会員の皆様のますますのご発展をお祈り申し上げます。



2. 平成 19 年度水環境学会九州支部大会 研究報告

日時：平成 20 年 3 月 1 日 13:00 ~ 16:30

場所：熊本大学工学部 工学部 2 号館

セッション

(担当：福岡市保健環境研究所・水落敏朗)

本セッションでは 4 編の発表がなされた。

「土木遺産と水圏生物 - 横土井と通潤用水の生物多様性 - 」では、土木遺産の生物多様性保全の観点からの価値について報告された。水圏生物だけでなく、植生や土質なども含めた保全に関する研究が期待される場所である。

「有明海における河川由来懸濁粒子の堆積挙動の推定方法」は、二枚貝類保全や底質環境改善に向けた基礎研究の一環として、数値シミュレーションにより海底に堆積する懸濁粒子

の起源及びその寄与割合を推定するものである。粒子の径及び凝集沈殿に関する今後の研究が望まれるところである。

「特定事業場排水中に含まれる溶存態ケイ素の実態調査」は、「シリカ欠損仮説」に着目し、特定事業場からの溶存態ケイ素(D-Si) 排出負荷量の算定及び業種間の差異を示したものである。今後実施予定の自然由来 D-Si 調査をあわせた水域中 D-Si 寄与率の算定が待たれる。

「都市河川における全亜鉛とその存在形態との関係」では、通常時及び降雨時調査の結果、水質予測方法として溶存態亜鉛(D-Zn) 負荷量から全亜鉛濃度を算定する方法が提案されるとともに、水質管理指標としての D-Zn 濃度の有用性が示唆された。

セッション

(担当：長崎大学工学部・西田渉)

このセッションでも興味深い4件の発表がなされ、参加者との活発な質疑応答がなされた。以下に各発表の概要を記す。高梨氏らの「変異原性物質生成能(MFP)による農薬の環境安全性評価」では、生分解された農薬についてその塩素処理による変異原性の発現を明らかにしようとしており、塩素処理によって生成能が高められ得ることが示された。加納氏らの「重み付差分法と模型実験による高濃度酸素水の流れ及び濃度解析」では、ダム湖底部に注入された高濃度酸素水の鉛直2次元的な挙動を実験・数値解析から検討している。密度流的な水の動きを把握する場合において、この研究対象条件下では溶存酸素の濃度差を無視できないことを指摘したものと考えられる。北野氏らの「江津湖におけるヘドロの特性およびその有効利用」では、当湖の堆積土中の栄養塩分布等が報告され、また植物の培養土としての活用の可能性が検討された。黒木氏らの「粗朶撈工と気泡噴流による泥質干潟での細粒分捕捉効果に関する研究」では、有明海の底泥の細粒化防止を目的に掲げ、粗朶撈工の懸濁物質のトラッピング強化が検討されており、現地観測や数値解析の結果から、気泡噴流の追加によってその効果を高め得る

ことが報告された。

セッション

(担当：佐賀大学低平地研究センター・山西博幸)

本セッションでは4編の講演がなされた。4編中2編は「干潟環境」や「底生生物」に関する研究、残り2編は「下廃水処理」に関する研究であった。以下、講演および質疑の内容を総括する形でそれぞれについて簡単にとりまとめた。

藤井らは、博多湾奥部に位置する和白干潟で夏季に大量発生するアオサによるアサリへの影響と、アオサ被害対策として施したネットによる効果やアサリの長期変動について報告した。その結果、保護ネットを施した場とそうでない場でアサリの生残数に大きく影響することやアオサの大量発生による干潟面の被覆とアオサ自身の腐敗による影響を指摘した。今後とも長期的な調査の継続とこれらの調査結果がアサリの保護のためのアオサ対策に寄与すると思われる。

道山らは、藤井らと同様に和白干潟でのアサリに着目し、その生活史とともに個体群の変動因子について検討を行った。このなかで、春期の着底稚貝の個体密度は高いにもかかわらず、和白干潟でのアサリの初期減耗が生じる原因として、多くの潮干狩り客による底泥の掘り返しや埋没に原因があるのではないかとの推察が示された。また、アオサによる着底稚貝の加入や生残が阻害された可能性を示唆した。アサリを含めた生物資源の維持管理には対象生物の生活史の理解とその連続した環境保全が望まれる。

中原らは、機能性を有する廃水処理担体としてソフトロンキューブに着目した。実験は回分形式で行われ、ばっき槽内にソフトロンキューブを投入し、水中の有機物酸化と硝化反応の状況について検討した。その結果、付着担体としてソフトロンキューブが有効で硝化反応も確認された。また、MLSS濃度の減少にもBOD除去効果を有し、生物付着担体としての機能を十分に発現していたことなどを明らかにした。廃水処理としての効率評価とその解明や実用化

に向けた今後の研究に期待したい。

川久保らは、高効率廃水処理技術として注目を集めている Anammox 処理技術と部分亜硝酸化との組み合わせることでの嫌気性硝化脱離液の処理について検討した。その結果、水温、pH の制御をしなくとも、脱離液中の高 pH で遊離した NH_3 や HNO_3 によって亜硝酸酸化細菌の活性が抑制され、Anammox 処理の前処理に必要な部分亜硝酸化が可能となることを明らかにした。Anammox 処理に関する先導的な研究を行う著者らの今後の活躍に期待したい。

当日は時間的制約のため、それぞれの内容の詳細について十分な議論ができたとはいえないものの、九州地区での「干潟環境」、「生態系」、「水処理」等を切り口とした研究成果の一端を垣間見ることができた。今後の研究発展を大いに期待したいところである。

セッション

(担当：鹿児島大学工学部・高梨啓和)

セッション では、Anammox 細菌に係る発表が 2 件、エチレングリコール排水の嫌気処理に関する発表が 1 件、熱帯地方に適した汚水処理技術に関する発表が 1 件報告された。

熊本大学の中村らによる「海面埋立処分場低泥試料からの海洋性 Anammox 細菌の集積培養に関する研究」では、海面埋立処分場低泥を接種源として海洋性 Anammox 細菌の集積培養に成功したことが報告された。また、集積された細菌群の微生物叢解析の結果が報告された。

崇城大学の藤井らによる「anammox 菌 KSU-1 株の持つ「異常」c 型ヘムタンパク質」では、KUS-1 株に発現している低分子量のヘムタンパク質についての検討がなされ、同タンパク質が電子伝達のスイッチの役割を有する可能性が報告された。

熊本大学の Wenjie らによる「PVA-gel beads application to the anaerobic treatment of ethylene glycol containing wastewater」では、UASB 及び AFBR の両リアクター中において、PVA ゲル粒子が COD 除去に有効であることが報告された。

元熊本県の村嶋による「熱帯地方への応用可

能な汚水処理技術を模索して」では、インドネシアにおける処理施設及び河川調査結果が報告された。また、日本から援助可能と考えられる技術について紹介された。



3 .平成 19 年度水環境学会九州支部大会 総会報告

宮崎大学工学部 鈴木 祥広

表記大会が平成 20 年 3 月 1 日(土)に熊本大学工学部を会場として開催され、支部役員会、究発表会および総会が行われた。

【総会報告】

古川憲治支部長(熊本大学)から総会開会の挨拶があり、議長として高梨啓和氏(鹿児島大学)が選出された。定足数が確認され、定数を満たしていることから総会を開催した。総会の議題は以下の通りであった。なお、平成 19 年

度支部決算報告ならびに平成20年度支部予算については、本ニューズレターに別途その報告が記載されている。

1. 議題

1) 平成19年度支部会計決算報告

水落敏朗幹事(福岡市)より、平成19年度支部決算(案)の説明があり、本支部大会の経費も含めた決算を20年度ニューズレターで掲載することで、承認された。

2) 平成20年度支部役員

高見徹幹事長(大分高専)より、平成20年度の支部役員(案)が提案され、了承された。幹事会委員、支部表彰選考委員および支部学術補助選考委員の選出については、支部長に一任することで了承された。

3) 平成20年度支部事業計画

本年度の事業として以下の項目について審議が行われた。

定例支部総会・研究発表会の開催:熊本大学において、平成21年1月~3月の日程で次回支部大会を開催することが提案され、了承された。

支部表彰の実施:本年度と同様に支部内で活躍されている会員や諸団体に対して積極的に表彰していくことが了承された。各賞の申請・推薦方法についてはニューズレターや会員への資料送付によって周知することになった。

支部ニューズレターの発行:例年どおり、20年度のニューズレターを20年6月頃に発行することになった。

水環境若手研究・実務者育成基金による学術研究補助事業の実施:20年度も実施することです承された。

九州支部シリーズ講演会の開催:山崎惟義役員(福岡大学)から「美味しい水の飲める水環境とそのメカニズム」をキーワードとした現地学習会の企画が提案され、九州支部シリーズ講演会として実施することが了承された。詳細については幹事会で企画し、支部会員へ周知す

ることになった。

4) 平成20年度支部会計予算報告

水落幹事より平成20年度決算(案)の説明があり、承認された。

2. 報告

1) 平成18年度支部活動報告

支部ニューズレター発行の報告:熊谷博史氏(福岡県)より平成19年6月にニューズレター(No.16)を発行したことが報告された(217通発送)。

第10回の本水環境学会シンポジウム:古川支部長より、2007年9月18日~19日に熊本大学で開催され、支部会員の協力もあって、例年になく多数の研究発表件数と参加者数となったことが報告された。

水環境若手研究・実務者育成基金による学術研究補助事業

下記の事業への助成について報告があり、学術活動支援が効果的に活用されたことが確認された。

佐賀大学有明総合研究プロジェクト(50千円) 講師・山本浩一氏

「ノンポイント汚染研究委員会ワークショップ in 有明海 公開シンポジウム」

長崎大学工学部(50千円) 准教授・西田渉氏

「公開特別講演会の開催(水環境に関する講演会とパネル展)」

支部共済事業:高見幹事長から下記の共催が報告された。

九州大学 今任稔彦氏

「日本分析化学会九州支部 第48回分析講習会」

2) 支部表彰 平成19年度日本水環境学会九州支部表彰受賞者

受賞者の紹介がなされ、受賞者からの挨拶があった。

学術奨励賞 九州大学大学院農学研究院助教 鬼倉徳雄氏

水環境貢献賞 ふくおか湿地保全研究会

服部卓朗 氏

以上の議題と報告について審議を行い、約1時間で総会はつつがなく終了した。



4. 平成 19 年度支部表彰の よろこびのことば

・水環境学会九州支部学術奨励賞を受賞して
九州大学大学院農学研究院
鬼倉 徳雄

この度は、(社)日本水環境学会九州支部学術奨励賞を賜りまして、誠にありがとうございました。また、ご推薦いただきました九州大学の嶋雄治先生をはじめ、諸先生方へ深く感謝申し上げます。

受賞対象研究は、「有明海沿岸域のクリークにおける淡水魚類の生息の有無・生息密度とクリークの護岸形状との関係」です。日本に生息する淡水魚類のうち水田や水路に生息する種の大半は絶滅の危機にさらされています。有明海沿岸のクリーク地帯にはそのような水路に生息する希少魚が今なお多く生息し、その中には本州地方でほとんど姿を見ることができなくなった種などが含まれ、クリーク地帯の保全価値は日々高まっています。しかし、豊富な野生生物が見られるクリーク地帯でも、希少魚類に対して様々な人為的影響が出ています。農地整備の中で行われたクリークの護岸改修や外来生物の移入などです。今回の受賞対象研究は、希少魚類の保全の視点からクリークの護岸形状を評価したものです。

持続的農業生産と希少魚類の保全を両立させることは難しいことかもしれませんが、かつて難しかった治水と河川生態系保全の両立に対する努力が、行政、研究者、市民の協力によって各地で積極的に行われるようになりました。農地に関してはまだまだ知見が不足していることと思いますが、河川と同じことが水田地帯でもできるはずで、本研究の成果が農地整備と希少魚類の保全を両立する上の一

助になれば幸いです。そして、全国で姿を消している希少魚類が今なお残る有明海周辺のクリーク地帯は、全国の研究者から常に注目されているということを肝に銘じ、今後もクリークに見られる生態系の保全のために力を注ぐつもりです。最後になりましたが、本賞の名に恥じぬよう今後も一層の精進を重ねる所存です。

・水環境貢献賞を受賞して御礼のご挨拶
ふくおか湿地保全研究会
代表 服部卓郎

この度水環境貢献賞をいただくことになり、会員一同感謝申し上げます。

受賞に際しては、九州大学津屋崎水産実験所の鬼倉先生のご推薦があったことをお聞きしました。鬼倉先生はじめ学生の皆さんには、日頃から私達の活動に際して、専門家の立場で何かとご指導をいただいております。誠にありがとうございます。

湿地研は、私たちの財産である自然環境を次世代に残すために必要な活動を行い、自然環境の保全に寄与することを目的として、2003年12月20日に設立したもので未だ若い集団です。主な活動地域は福岡都市圏の湿地環境です。

わたしたちが考える「湿地」とは、沢・溪流・河川・湖沼・干潟・海岸やダム湖・水田・水路・溜め池・水溜りなど全ての水辺環境です。私たちは、このような全ての水辺環境を中心に湿地と有機的なつながりを持つ自然環境全体を後世に残すことを活動の目的としています。

福岡都市圏には貴重な自然環境があり、そこに特異な野生生物が生育・生息していますが、これらはこの環境と共に育まれてきた歴史と文化と共生してきたものです。しかし、その貴重な自然環境の実態はあまり知られておらず、環境保全に対する理解も進んでいません。そこで、私たちは自然環境の情報を定量的に把握すると共に、市民の皆さんに広く情報を提供し、環境保全活動を市民・行政の皆さんと協働して行うことを活動の中心としています。これまでに、多々良川河口において国際的な希少種「クロツラヘラサギ」のねぐら・休息場の創出を行い、今では地域の皆さんに多々良川のシンボル

として愛されるようになりました。

私たちはこれからも、このような湿地の「保全・再生」、学習・遊びの場など「賢明な利用」、保全や賢明な利用のために、人々の交流や情報交換、教育、普及啓発活動を図る「CEPA」（Communication, Education, and Public Awareness）を活動の中心として進めていきます。今後とも専門家である皆様のご指導をお願いいたします。



5. 水環境若手研究・実務者育成基金による学術研究補助事業による助成報告

第11回日本水環境学会
ノンポイント汚染研究委員会
ワークショップ公開シンポジウム

佐賀大学有明海総合研究プロジェクト
山本浩一

平成19年9月5日に上記シンポジウムが佐賀県青年会館で行われた。表記シンポジウム開催にあたり、水環境学会九州支部から助成を受けた。ここに謝意を示すとともに、以下助成報告をとりまとめる。

日本水環境学会ノンポイント汚染研究委員会では毎年夏にワークショップを開催しており（平成19年は佐賀で開催）、研究成果の社会還元の一環として一般の参加が可能な公開シンポジウムも毎年行っている。本シンポジウムは有明海流域からの汚濁負荷把握について最新の知見をもとに意見を交換する目的で開催し、「わが国におけるノンポイント汚染研究の到達点と有明海流入負荷把握への課題」として実施した。

午前中は市川新博士、浮田正夫博士、橘治國博士の3名の研究者を迎え、水質汚濁研究の歴史と最新の知見について講演があった。

午後コーディネータに楠田哲也教授（北九州市立大学）を迎え、坂本清一氏（環境省）、白谷栄作氏（農村工学研究所）、朝田将氏（国交

省九州地方整備局）、海老瀬潜一教授（摂南大学）、速水祐一准教授（佐賀大有明プロ）によるパネルディスカッションが行われた。パネルディスカッションでは下記が確認された。

有明海流域における信頼できる原単位データの取得が重要。

低平地域からの汚濁負荷の流達率や非灌漑期における汚濁負荷流出の実態が未解明。

長期的な河川水質のモニタリング体制の構築の重要性。

海域でのモデルへの入力条件となり得るような水質データ（形態別リン・窒素等）取得の重要性。

シンポジウム参加者は合計127名にのぼり、学会関係者82名（うち学生48名）に加え、学内外から45名の参加を得た。会場では大変活発な討論が行われた。本シンポジウムは平成19年9月4日付の読売新聞に掲載されたほか、記事が佐賀新聞（平成19年9月6日付）上で紹介された。

本シンポジウムならびに関連ワークショップ開催にご尽力いただいた佐賀県、有明海再生機構、福岡県保健環境研究所、長崎県、ご参加いただいた九州支部会員各位に深謝いたします。



講演の様子（浮田博士）



全国から合計128名の参加があった。



パネルディスカッションの様子

「環境問題に関する公開特別講演会」

長崎大学工学部・西田渉

2007(平成19)年12月21日(金)に上記の公開特別講演会が長崎大学にて開催された。公開特別講演会の開催にあたり、水環境学会九州支部から助成を賜りました。ここに深く御礼申し上げますとともに、以下に講演会の概要を報告いたします。

この講演会は、大学の研究者がこれまでに蓄積してきた水環境に関する知見を、若手研究者ならびに学外の実務担当者に公開することで、情報の共有と問題解決の協力体制の拡充する目的で開催された。会の前半部には、後藤恵之輔教授、野口正人教授から国内外における水問題の現状と水環境の変遷に関する講演をいただいた。豊富な経験に基づく国際的な視野からの興味深い講演であった。後半部は、長崎県環境保健研究センターの森淳子氏、長崎市環境部環境保全課の吉田雅文氏を迎え、隣国から越境する環境問題への対応についてのパネルディスカッションを開催した。そこでは、水域への供給源となる大気質の現状についても話題提供されるとともに、問題解決に向けた今後の連携方策が議論された。

本会には、席数80の会場がほぼ満席となる数の参加者があり、その内の約1/3は国や県、市、地元企業からの参加であった。広報活動が十分ではない中、一般からの参加があったことは水環境に関する問題への関心の高さを表しているものと思われる。これを機に人的ネット

ワークの拡大をはかり、今後の更なる展開を考えたい。



6.九州支部からのお知らせ

(研究会開催・表彰の変更等について)

大分工業高等専門学校・高見徹

本年度(平成20年度)から九州支部研究発表会の実施方法・内容の一部が変わります。

本年度の研究発表会は、平成21年2月下旬から3月初旬に熊本大学で開催される予定です。本年度は研究発表会の充実と将来を担う若手研究者の育成を目的として、開催時間の拡大と新たに学生を含む若手研究者を対象とした優秀講演者表彰を実施します。数多くの会員の皆様の講演と参加を期待しています。

また、本研究発表会の内容を学会誌の会告に掲載できるようにするため、研究発表会における講演者および講演題目の登録・申込みの締切を12月下旬までとし、講演概要の提出締切を2月中旬までに変更致します。これらの変更を含む実施方法・内容については詳細が決まり次第、会員の皆様へご案内致します。

ご承知おきの上、皆様のご協力をお願い申し上げます。



お知らせ

水環境学会九州支部からの連絡をメールで希望される方は、
事務局：yama@fukuoka-u.ac.jp
まで御連絡下さい。

収支報告は報告書をスキャナで取り込んだものを加工せずに貼り付けています。

(平成19年4月1日から平成20年3月31日まで)

(1) 収入の部

(単位: 円)

科目	平成19年度 予算額(a)	決算額(b)	差異(b-a)	備考
講演会参加費収入	1,250,000	45,000	-1,205,000	支部総会
本部より活動費等収入	250,000	250,000	0	
印税支部分配金	0	5,000	5,000	「日本の水環境」の印税支部分配金
利息収入	0	5,989	5,989	
その他の	0	724,840	724,840	シンポジウム補助金等
当期収入合計(A)	1,500,000	1,030,829	-469,171	
前期繰越収支差額	3,890,025	3,890,025	0	
収入合計(B)	5,390,025	4,920,854	-469,171	

(2) 支出の部

科目	平成19年度 予算額(a)	決算額(b)	差異(b-a)	備考
支部総会開催経費	600,000	38,936	-561,064	
シリーズ講習会開催経費	1,250,000	0	-1,250,000	
研究会等補助金	2,000,000	100,000	-1,900,000	講演会・研究発表等補助
会議費	200,000	9,540	-190,460	役員会等
交通費	500,000	0	-500,000	幹事会等
通信運搬費	300,000	63,030	-236,970	ニューズレター等
消耗品費	50,000	31,563	-18,437	
印刷製本費	200,000	100,275	-99,725	支部研究発表会要旨集等
込込手数料	20,000	2,310	-17,690	
雑費	50,000	420	-49,580	残高証明書
予備費	220,025	724,840	504,815	シンポジウム補助金等
当期支出合計(C)	5,390,025	1,070,914	-4,319,111	
当期収支差額(A)-(C)	-3,890,025	-40,085	3,667,214	
次期繰越収支差額(B)-(C)	0	3,849,940		

繰越金明細	金額
定期預金	0
普通預金	3,849,940
郵便貯金	0
現金	0
繰越金合計	3,849,940

収支関係書類を監査した結果、いずれも適正に処理されておりましたので報告します。

監事

内海 英雄

監事

山西 博幸

平成20年度支部収支(案)

(1) 収入の部

科 目	金額 (円)	備 考
講演会参加費収入	50,000	支部総会
シリーズ講習会参加費収入	950,000	シリーズ講習会
本部より活動費収入	250,000	
当期収入合計	1,250,000	
前期繰越金	3,849,940	
収入合計	5,099,940	

(2) 支出の部

科 目	金額 (円)	備 考
支部総会開催経費	600,000	
シリーズ講習会開催経費	950,000	
研究会等補助金	2,000,000	講演会・研究発表等補助
会議費	200,000	役員会等
交通費	500,000	幹事会等
通信運搬費	300,000	ニューズレター等
消耗品費	50,000	
印刷製本費	200,000	支部研究発表会要旨集
振込手数料	20,000	
雑費	50,000	
予備費	229,940	
当期支出合計	5,099,940	

平成 20 年度 日本水環境学会九州支部 支部役員

役 職	氏 名	所 属	職 名
支部長	古川 憲治	熊本大学大学院自然科学研究科複合新領域科学専攻	教授
副支部長	山崎 惟義	福岡大学工学部	教授
評議員	鬼倉 徳雄	九州大学大学院農学研究院	助教
評議員	小野原 裕子	鹿児島県環境保健センター	水質部長
評議員	門上 希和夫	北九州市立大学大学院 国際環境工学研究科アクア研究センター	教授
評議員	金子 好雄	東海大学工学部	准教授
評議員	椛田 聖孝	東海大学農学部	教授
評議員	川越 保徳	熊本大学大学院自然科学研究科	准教授
評議員	久場 隆広	九州大学大学院工学研究院環境都市部門	准教授
評議員	熊谷 博史	福岡県保健環境研究所	研究員
評議員	古賀 実	熊本県立大学環境共生学部	教授
評議員	鈴木 祥広	宮崎大学工学部	准教授
評議員	高梨 啓和	鹿児島大学工学部	准教授
評議員	徳永 隆司	株式会社新日本環境コンサルタント	技術部長
評議員	西田 涉	長崎大学工学部	准教授
評議員	西留 清	国立鹿児島工業高等専門学校	教授
評議員	原口 公子	北九州市環境科学研究所	環境研究課長
評議員	槇田 裕之	九州大学大学院医学研究院	准教授
評議員	松岡 信明	財団法人 九州環境管理協会	事業本部長
評議員	宮城 俊彦	沖縄県衛生環境研究所	環境科学班班長
評議員	矢ヶ部 輝明	株式会社 建設技術研究所 九州支社 環境システム部	部長
評議員	安井 英斉	北九州市立大学国際環境工学部エネルギー循環化学科	教授
評議員	山西 博幸	佐賀大学低平地研究センター	准教授
評議員	渡辺 亮一	福岡大学工学部	講師
監事	内海 英雄	九州大学大学院薬学研究院	教授
監事	加納 正道	九州産業大学工学部	教授
幹事	高見 徹	大分工業高等専門学校都市システム工学科	准教授
幹事	水落 敏朗	福岡市保健環境研究所	主任研究員
顧問	北森 成治		
顧問	藤崎 一裕	九州工業大学工学部	名誉教授